

# 幸福のハンドベル

結城昌子

わたしが旅に出るのは

海が見たいからではありません

海酸漿の磯の香りが

岩底叩く荒波が

わたしの身体を包むから

わたしはもう一日生きてゆく

わたしが旅に出るのは

山が見たいからではありません

谷下りる風の音が

お花畑の雲のヴェールが

わたしの身体を包むから

わたしはもう一日生きてゆく

わたしが旅に出るのは

川が見たいからではありません

カワセミの緑の翡翠が

ホタルの白い灯火が

わたしの身体を包むから

わたしはもう一日生きてゆく

わたしが旅に出るのは

里が見たいからではありません

物真似カケスの呼ぶ声が

桃色レースの踊り子草が

わたしの身体を包むから

わたしはもう一日生きてゆく

わたしが旅に出るのは

街の博覧会が見たいからではありません

人、人、人のざわめきが

クラクションの連弾が

わたしの身体を包むから

わたしはもう一日生きてゆく

……冬枯れて わたしの身体が

宙に浮いた時

垂り雪は わたしを氷江の深みに落すでしょう

沈黙が破られ 物言わぬわたしは

突然蘇るのです

捨て場のない 重い荷物をしよつたまま

わたしは嬉しそうに

教会へ入ります

聖なる音楽堂で もしも魂の戦慄を

受けたなら

わたしはきつと

神父のコンダクターに

恋をするのでしょうか

恋するわたしは タクトにふられ

新しい旅を始めます

幸福のハンドベルを持って

歩きはじめるわたし……

その日 わたしはきつと

終りの無い旅に向うのでしよう

終りの無い旅に向うのでしよう

わたしは

生きている。